

生物学および進化論の知見を社会学あるいは社会科学に埋め込む基盤としての

IPS 理論枠組

明治大学 内藤朝雄

1 目的

この報告の目的は、個体よりもミクロな内的水準に設定される構成要素が複数個体水準でまとまる組織化 (IPS: Intra-inter Personal Spiral) という理論枠組 (内藤: 1996, 2001, 2009, 2011, 2014, 2016) の有効性、およびこの枠組を生物学、精神医学、進化論、心理学、人類学などの隣接領域の知見と接合する可能性を示すことである。

2 方法

仮説構成的な理論構築および隣接領域の知見の検討。

3 結果

①理論枠組はさまざまに設定可能であるが、そのうち個体水準のものを構成要素に設定する従来の社会学および社会科学の枠組は、個体よりもミクロな水準のものを構成要素に指定する IPS 理論のとおり、個体水準ユニットでの統合傾向がある程度大きい場合に適合する特殊なタイプである。②IPS 理論に埋め込む隣接領域の知見は不断に変化している。例えば仮にミラーニューロン説が「自他を重ねる」行動の根幹的メカニズムの担い手として有望である時期から、些末な部分プロセスとみなされる時期へと移り変わることがあるとして、当該説をそのまま IPS に埋め込むよりも、何らかの「自他を重ねる機能要素 (〇〇年時点では担い手としてミラーニューロン説が有望)」といった抽象度を上げた論述を行い、そのうえで、さまざまな具体的な研究成果を取り替え可能という条件つきで埋め込むと、防御性能が高くなる。③IPS 理論に埋め込む候補として、これまで試みてきた知見に加え、エピジェネティックなメカニズム (社会エピジェネティクスあるいはエピジェネティック社会学)、社会関係中のリアルタイム MRI 観察、対象に他生物を含めた IPS 比較社会学などの試みが考えられる。④生物学的な隣接領域との接合を試みる場合、説明と了解という古くからの難問が立ちあがってくる。それに対し、説明のフィールドと了解のフィールドという二分法の代わりに、さまざまな〈界〉のプラクティカルな共同連関モデル (内藤, 2004) を用いることができる。⑤進化論などを使用する際にありがちなカテゴリー短絡問題は衝動原形論 (内藤, 2014) により克服することができる。⑥さまざまな領域の研究者が集まる共同研究が必要である。その異分野連結のテーブルという点で、ディシプリンが定かでない社会学はその緩さが強みになる。

4 結論

IPS 理論は、説明力のある理論として有望であるのみならず、多領域を結びつけつつ社会学および社会科学の成長を促す触媒的なフロンティアとなりうるという点でも有益である。

文献

内藤朝雄, 1996, 「『いじめ』の社会関係論」 鬼塚雄丞他編『ライブラリ関連社会科学 3 自由な社会の条件』サイエンス社

内藤朝雄, 2001, 『いじめの社会理論』柏書房

内藤朝雄, 2004, 「存在指定をめぐる構築主義の不可能性と〈界〉の共同連関モデル」 日本社会病理学会編『現代の社会病理』第 14 号

内藤朝雄, 2009, 『いじめの構造』講談社

内藤朝雄, 2011, 「いじめの心理社会的生態学」『精神科治療学』第 26 巻 5 号、星和書店

内藤朝雄, 2014, 「進化論を社会科学に埋め込む理論としての分断即応モデルの衝動原型論」第 87 回日本社会学会大会発表

内藤朝雄, 2016, 「学校の秩序分析から社会の原理論へ——暴力の進化理論・いじめというモデル現象・理論的ブレークスルー」『岩波講座現代 第 8 巻 学習する社会の明日』岩波書店